

バレーボールの思い出

戸本 隆雄 (25回)

私が志太中学校1年に編入したのが昭和21年10月である。終戦を満州錦洲中学校1年生の時に経験し、満人による暴動・略奪、ソ連兵による抑留・見ず知らずの土地での釈放、生きがいのタバコの立売り、文具具の露天商など苦難の生活を乗り越えて8月下旬に引き揚げて来て体力を回復させた後のことである。

当時バレー部には同じ大富方面から通学している先輩方が多く、また道具がいらないという事で入部を決心した。

自宅から学校まで6キロの石ころだらけの道を歩いて通学した。

暗くなって練習をやめ帰途歩き出すと月が昇って夜道を通り抜けた。学校には当時体育館がなく、練習はすべてアウトコートでやり、雨天で止むを得ず天井が低い控所でやったことを覚えている。グラウンド北側のサッカーゴールの後ろには、まだ芋畑があった頃である。

当時はバレーボールは9人制のみであり、1年生の時、入沢(旧姓池谷)義君と2人で3年生の中に入ってやった。

また、一般上には部員がいなく2年生の時のチームは1年生1人を入れたチームで、当時の山静大会(山梨県と静岡県)に県代表として出場した。その冬、皆で話し合いアウトコートの排水工事を計画し、石や石灰殻等を入れた。

大変な工事だったが、当時の渡辺精馬校長に全校生徒の前で褒められたことを懐かしく思い出される。

3年生の最初の大会がスポーツ祭で宿敵葦山高を破り優勝した。インターハイ予選は当時、葦山高は全国3連覇していたので県予選には出場せず、決勝は静岡商高と対戦した。当時は草薙のアウト

コートだったが、急に降雨となり会場を静岡商高体育館に移った。

屋内での経験が楽しく敗退し、くやしい思いをした。

秋の国体予選には葦山高に敗れたが、当時の葦山高は全国でインターハイ3連覇、国体4連覇した強豪チームであった。

その葦山高が大学卒業後、教員として初任校となったことは、何か因縁を感じずにはいられない。



25-26 回生バレー部

その後の全日本総合の県予選では優勝し、山口で行われた本大会では1回戦で愛媛の実業団チームに負けた。

当時のチームをよく指導してくれたのが、2年先輩の山田(旧姓中村)重雄氏であり、彼を慕って、池谷君と一緒に同じ大学に進んだが、山田氏はモントリオールオリンピックで日本女子を率いて金メダルに輝いている。未だにバレーボールから離れられないが、うれしいことは、息子、孫と三代バレー部に所属したことである。

部活動小史

生物部 昆虫採集に明け暮れて

大塚 昌利 (31回)

「行くぞー」

授業が終われば捕虫網を持って自転車に乗り、潮山に向かうのが日課のような3年間であった。1955年に入学すると、岡野義治先輩から「生物部来いよ」と声をかけていただき、そのまま入部して昆虫班に属した。野に山に昆虫を追いかけたが、なんとも思えない深いのは、伝統である夏の寸又峠から光岳への採集行であった。千頭森林鉄道の揺れるトロッコでは大木にしがみつくと、大根沢小屋からは枕木を踏み、隧道では山蛭に血を吸われ、栃沢、釜ノ島小屋を経て沢尻小屋から根根伝いに光岳を目指した山行はすばらしく、釜ノ島小屋でのミスジチョウの乱舞は、今でも頭に浮かんでくる。OBにも参加していただき、顧問の太田喜和男先生をはじめ、3~1年生がひとつになって寝食を共にした体験は、忘れられない思い出であり、アットホームな部活動の源泉でもあった。瀬戸ノ谷から蔵田を経て笹間渡までの採集行では、蔵田小学校のトイレの手洗いでカレールを作った記憶もある。高草山も含め地元に着した採集成果の善積は、志太地域と大井川流域を含む平地、里山、山岳地域の生物諸相の解明に、大きく貢献してきたと思っている。

1956年に近隣でチャドクガが異常発生したことがあった。鈴木紳弐・紅林秀部先輩が中心になって、発生地や発生形態の特性調査を行い、その成果が認められて同年の鈴木

梅太郎賞を受賞したことも生物部の評価を高めた。文化祭では長年にわたって蓄積してきた昆虫・植物標本を展示し、その頃特に交流の深かった掛川西高生物部とは、文化祭でも相互に訪問しあっていた。こうした諸活動は、当時の藤枝東高校生物部の水準の高さを示すものであり、先輩から受け継がれた伝統が脈々と息づいていた。先年、生物部が千南原賞を受賞したのも、こうした伝統を着実に引き継いでくれている証左であると思う。

このような伝統と成果の積み重ねを、次代へと引き継いできたのが、機関誌「GEMMA」であった。採集記録はもちろんの技術、2色刷りのガリ版印刷でありながらその造りはすばらしく、表紙一面に描かれたカミキリムシなどの精緻さには目を瞠ったものである。

生態系の破壊や生物多様性の衰退がグローバル化しているが、小さな場所からの研究が積み重なって、大きな課題の解決が可能になる。生物部のますますの活躍に期待したい。



故郷を想う

鈴木 宏治 (38回)

鈴鹿医療科学大学 薬学部 教授

現在、多くの市町村で獣害による山林や田畑の荒廃が進んでいると聞く。この解決の一助になればと、最近、鹿肉の消費と流通を考える人たちが企画する「鹿肉料理を食する会」に参加した。料理の美味しさもあって、話題は参加者の故郷の獣害の様子から自慢話へと

発展し、最後は童謡「ふるさと」の大合唱となった。三番の歌詞「ころろざしをたして、いつの日にか帰らぬ山はあおき故郷 水は清き故郷」では涙を滂ませる方も多く、私もその一人で

アフリカで想う

高尾 具成 (59回)

毎日新聞 ヨハネスブルグ支局

南アフリカ共和国・ヨハネスブルクに赴任して3年余。主にサブサハラ・アフリカを持ち場に取材を続けている。会話もままならない状況下、助けとなるのが故郷が教えるだけのサッカーだ。原っぱや路上に小枝や石を置いただけのゴールを目指し、きょうも子どもたちが夕暮れまでボールを

追う。各地では子どもと草サッカーに興じ、大人たちとサッカー談義をする。知らぬ間に初対面の壁が低くなっていく。下手くそで壁が低くなったがサッカーが好きだった。だから2年の終わりで先輩や後輩、そして特別、同級生には多大な迷惑を掛けながらもサッカー部に所属させてもらった。ボールやスパイク磨きが大半だったが、練習試合で数回、藤色のユニフォームに袖を通した経験は忘れられない。全国大会出場予選を控えた84年の夏。オランダのプロチーム・フェイエノールト傘下の下部チームとの試合が組まれた。場所は藤枝市民グラウンド。私はスタンドで見守っていた。リードしていた後半間際に同点追いつかれた。試合後、みなが下を向いていると、監督が「内容は悪くない。相手は世界の強豪だ。自信を持って」と言った。その時の何だか清々しい気持ちを感じている。ボールを背負い、東高までの道のりを自転車で行ったが、自転車で走ったが偶然とサッカーと世界のつながりを感じた。

学業の方は、数学は0点や5点も増え、おそろしく30点前後だった英語の答案用紙全面には先生が赤ペンで記した激励文がいっぱいもあった。「明日あり」と思うころの凶悪夜半に風の吹かぬものは。英語構文は忘れたが親鸞聖人が9歳で得度する前夜に詠

随想

増田 玲司 (37回)

(株) シズデン総業 代表取締役社長

今回同窓会報に原稿をという依頼をいただいたため、久しぶりに高校時代のことを懐かしく思い出出すことができました。紙面に限りがあるので、いつの日にか紹介できませぬが、在学中にサッカー部が2回も全国制覇を遂げたこと、部活動は吹奏楽部でしたが、文化祭で先生に在籍でジャズバンドのステージをやり大目玉をくらったこと、藤枝駅から便便という乗り物で通学したことなど、思い出は全く憶えることなく私の脳裏に焼きついていました。

25年の時を過ぎて

鈴木 紀子 (59回)

弁護士 静岡はるひ法律事務所

そんなことを重ね合わせると、限りある命の大切さと正面から向き合い、ライフラインに携わっているという使命感と、藤枝東校の卒業生であるという誇りを胸に、今後とも社業に専念したいと改めて感じています。最後になりましたが、この広報誌を発行するために日頃からご尽力をいただいている

25年前、高3だった私はとにかく家を離れて静岡から出たと思った。だから卒業後は迷わず県外の大学を選び、以来、金沢(石川)、東京、小田原と移り住んだ。そして4年前、故郷に帰りたいの思いに駆られて静岡に戻り、今の場所に落ち着いている。この間25年、世の中は大きく変わり、私自身の立ち位置も変わった。あの頃の私は、勉強でうちのけでバスケットに明け暮れた高校生だったが、卒業が近づくと、自分分が何者でどこへ向かうべきかわからずやたらもがいていた。その私も今では法律事務所の看板を掲げ、曲がりなりにもトランプを抱え、困った人を助ける仕事をしている。25年の時が過ぎて、外観をみて立派になったと言っている人が、私自身は何も変わっていない。長旅をして知識は増え、表現方法は成長したが、嬉しいと思うこと、悲しいと感じる瞬間、許せないこと、物事の捉え方や感じ方はあの頃のままで。そしてこれからは先もずっと変わってほしいと

願っている。自分の感性を大切に、自分自身に嫌気がささないよう、無理に背伸びすることなくまっすぐに生きていきたいと思っています。

静岡に戻ってからは、おそろしく同窓生に出会う。「東高出身ですか。それなら先輩(後輩)ですわ」と言葉と交わり、卒業生の裾野の広さに感心すると同時に懐かしさと親近感を感じる。ここが自分の居場所だと実感する。昨年4月、卒業生14日目に静岡市内に新しく事務所を立ち上げた。2ヶ月間、大地に溢れる春の光のようになり、これからは先もずっとこの25年がずっと続いていくのだらうと思う。25年後、世の中がどう変わっていくかは想像もつかないが、私自身は今のまま変わらずにいたいと思。自分の生き方を否定せず、これから先も出会う人達には「はるひ」の由来を堂々と話せるような仕事をしたい。

恩師を訪ねて

やそじ 松村 八十治先生

在職II昭和24年4月~41年3月、51年4月~60年3月

恩師であるばかりでなく、卒業生でもある。旧制志太中時代の昭和18年卒、15回生の一人だ。なぜか記憶力がいいんだ。大概のことは覚えていて、「と言っただけで、母校の教壇に立っていたころのことはもちろん、70年前の志太中生当時の思い出をつい先日のことのように、克明に語ってくれた。人柄をしるはるはるならい言葉だ。

焼津市出身。昔、この辺で優秀なのは静岡中(静岡中、現・静岡商)と静岡商(静岡商)だったという。では志太中は、「ダテユウ、といつてたいたしたことはない」とか、志太中時代は剣道部に籍を置いていた。開校と同時に、サッカーを校技としただけあって、「サッカー部員はクラス対抗の選手の中から選ばれた」というが、剣道部も教師の眼鏡にかなった生徒だけが入部した。剣道に打ち込み、体育教師を志して日本体育専門学校(現・日本体育大)に進学、ハンドボール部に所属した。

栄光の31HR!

川路 智史 (44回)

(財)静岡観光コンベンション協会

藤枝東高校にギネスブックがあるという。是非我が31HRクラス会を認定していただきたい。特に秀才がいたとか、世に名だたる著名人を輩出したかという点ではないが、高校を卒業してから延々と1回のクラス会を続けてきた。

謳歌しているが、受け入れる店が限られてしまうのが頭の痛いところである。記録でみると同級生の店(山内屋)で6回、「四川飯店」で4回、「神田中屋」で4回、「よし寿司」で4回というところが開催店ベスト4である。